

冊數	番號	部門
三	一四	二五

種承久

近江輿地志略

十一

八

日	寺
寺	日
寺	日
寺	日
寺	日

高
江
興
地
志
畧
卷之三十九

署所 寒川辰清輯

栗本郡第一

和名抄
栗本

支以栗本郡を曰く地続曰く紀及近畿式化す栗本郡也
俗云栗本乃るる也とてちもうを乃るのーと浮く
ちもう字すとてつ化せとヒガキトモ不被多アヒ史実源
ひとくい語と云ひんや栗本アリ文字少シ也
又曰近いり栗の樹也天竺アリ稱櫻乃往アリ今ノ栗乃
文少西と本と今此嘗栗乃樹也天竺也漫考氏先公

呼と應本と上奇行哉と云ひ、一夜他人を事代
立り本公獻やくも。般日於可俗はくわざるも所と
場所はく々栗木の所處をす。栗乃樹乃枝樹也。
流ともあらかじめあはれうるがゆく栗也と名づくと
うな候りはくもと又始りまし。先代齋事也記曰
景行天皇四年春二月甲寅天皇幸箕野路經濟海一枯木
墮稍穿空入空向由於國元曰神代栗木坎木崇時枝並於
山嶽故曰並枝山又並縣於高峰故曰並縣山毎年葉落成
工土中悉栗葉也。其獨也く栗乃字ち西と本の字を
會せ文多うゆ。西と本とを合する文字也。甲斐郡石部

乃傳引以て而據山々栗乃樹と樹名乎にゆく人故
大喜せし所也。先代齋事也記云然大成後より之
傳書之。久し梓行かくちうどつこと傳すらむか
久今以て古板と識すれどさう西々方乃院棕榈
加んして芳樹淡々近いぞ栗也耶。大ちく樹の樹名也
園立而居ちくちく枝走るなり。丹波乃小諸
富士名も伊賀也。久の内一派、羨ましむ。不見たれ
たれを西へ移るもそより志安栗也甲斐三郡のち民栗
日高也。田舎也。四島淡多也。宇都くらどみ
牛乳也。山也。希也。栗也。常緑也。而柿も也。栗也。

ゆゑくらうあつた。田畠を購ひとまし。是ハ核の核と
寄りの時代も有つて、子を販賣せられ、おどかく作事。
之は近頃栗田の本の如く、一村郡の名所へゆき、
田を詣る。近頃栗田郡ともぞあせり。栗田
郡の出で、一村上り栗田とある。一村や栗田
栗の種子の選り、栗田と字をもつて栗田なり文字書
く。か一村して栗むと字をもつて栗田の事。云
ふ事もあせ。然しは原野は廣い。仍夷より記
せり。孟嘗の況信用をへんれんせ致ておせり。栗山城

ノ。山を山とす。山の山とす。山が山とす。山と
山とす。山とす。山とす。山とす。山とす。山とす。山とす。
民ハ時節乃ち春と山甲と秋と山甲と。山とす。山とす。山とす。
山とす。山とす。山とす。山とす。山とす。山とす。山とす。山とす。
山とす。山とす。山とす。山とす。山とす。山とす。山とす。山とす。
山とす。山とす。山とす。山とす。山とす。山とす。山とす。山とす。

一
勢田郷 原代和久野、勢田の名は、アカハ勢田
と云ふ。併らに也。アカハ勢田と云ふ。日記
アカハ勢田と云ふ。亦信勢田の文書とも申ゆ。勢多
の文書と申すと云ふ。勢多の文書と云ふ。勢多

勢のあちり次第延年式もす勢多リ持とて六勢
公近いは存多とひ僧修が治城をと國ノ一和氣、
捨本御等も存累を致上るど、此より以て税入

國府とす。小國乃ち所と國例と不も同ト事くも國
主事と存く、その事はうるを許。其餘不も或家
施設より古代より可かれ。もたゞ、傍はのとの府
大坂御の國府、場主の府をたはりや、家主の府を
おいておほにす。公候より乃候所をく一モ乃者と下
かきのものとす。言慶集可考乃都とすを思ひ、府を云
と號す。さるハ、御の領主と有しとこそ、延年式休ま

或ト化粧よき近江國府とを以用、小花を修復と
川ノ開削のれより彼方より法家の格を倣して筆ふ
紳々入らる五色ノ色也。之ゆき得し得す。延年式
曰、御院六處、櫻川供奉師、御近に御多門、几舟内親王在
路、每至處、事に伊勢等櫻、勢多、鈴原下楠、多氣川等遠
神部ト都各二人在前鎮役之ヲ、臣主も、母の並にめ
立すしやうりうひも、のぞむるのゆうて、ひそみテ
されしとぞ、不ハりて、のぞむるのゆうて、ひそみテ

まともにはれえとは既り之朝至りて、始三日守差

御茶のうちより次戸延式もす勢多の時とて元豊
以近に之を有すと云ひ傳移が治成かとゆく。かく妙
珍本御写文府案を終りて、
此書は地ノ事より

國府とて、小國乃ち新とて國側とて、同一年とて、國
書とて、古文とて、その事は多くある。新終不事か家
施權より古文より云ひかれ。もとへり、新はのこの府も
大坂御の國府ハ、場所の府も大はのや、家より、新公
主に之を移す事は、新より往來多く一モリ書と下
せしものと云う。言慶集に表乃御とすを、も府を云
ふれり。其の御事の研主と有り、とこそ近式代主

或いは、此より近江小國府とて、日向小花を修復と
川とて、御の御主とて、彼方より請家の様と倣つて、其
御入らるる所と紀也。主條より得て、延喜式
曰、神院六歲、保川供奉御御近に院多門、凡内親王在
路、每至歲、近に伊勢等、保勢多、鈴麻下、桶多、氣門等處
神部ト部各二人在前鎮役之を、臣主共々母の近にめ
せし者と、少い行きて、のぞく、のぞく、のぞく、のぞく、
されど、とて、とて、とて、とて、とて、とて、とて、とて、

まくちほねえは、既りを朝主トテ、御三に歸す。

トヨリテ今も虎の筋を引く事もあらず
テモトモ止む事なしに停止セラシテ今も深澤アリ

一 勢多橋 是志賀栗子ニ於ケル所也栗子有之
少橋と志賀少橋と少橋と栗子都トシテ近シテ
ト勢多橋と云ひテ栗子都小島也アリテ大橋
九十六万少橋也大橋四弓行少橋と少橋との
中弓と中弓と少橋と少橋と少橋と少橋と
中弓と中弓と少橋少橋とソシテ一大橋と云ひテ大
橋の事也少橋と少橋と少橋と少橋と少橋と少橋
車輪三十六もの一ツを鐵土佐造シシテ三十六輪の陽

宇忍比律師は橋と送喜製送喜西土の製シ假り石
唐橋と云ふ俗西土の事也カシムトミト年
物今行うて橋の概を除と止スルホシ後古ノ後モ
トシテ唐橋と云ふ事也天皇の御代は橋と架シ始
無橋西土の製送喜御代ノ前橋と云ふ事也御代也
我朝の上古天の原橋と云フテ是れ子孫の御代也
倣シテ繫アリ得シテソシテ橋の製西土
彦金の機立傳也アリ唐橋と云ふ事也御代也

らす事のあらずと云ふ事無一物也。西
りの唐橋を古幹立て脇役一人移すハシ。西
土の製造ノ模様。上層橋は木造の中吹き。下邦の
橋は一層ハシ。下層ハシ。中吹き。中吹き。下邦の
剣山中畠の例。下邦。下邦。中畠。中畠。下邦の
アーチ橋。中畠の事。中畠の事。中畠の事。
歌うけ駒。中畠の事。中畠の事。中畠の事。
中畠の事。中畠の事。中畠の事。中畠の事。
中畠の事。中畠の事。中畠の事。中畠の事。
うへ。歌うけ駒。中畠の事。中畠の事。中畠の事。
うへ。歌うけ駒。中畠の事。中畠の事。中畠の事。

と多め。而も。御車と御馬。小駕橋と御車と御馬も
革を以て。又御車と御馬も。御車と御馬も。御車と御馬も。
至西移。行幸。又唐橋と。下層橋と。中吹き。中吹き
と。中吹き。又中吹き。又中吹き。又中吹き。又中吹き。
は。中吹き。中吹き。中吹き。中吹き。中吹き。中吹き。中吹き。
勢多驛。國分寺。勢多橋。不下馬。下馬。橋。今。勢多
行。國。勢多。勢多。勢多。勢多。勢多。勢多。勢多。勢多。
古の事。古の事。古の事。古の事。古の事。古の事。古の事。
て。車の事。車の事。車の事。車の事。車の事。車の事。車の事。

也々々々々下橋修もさし叶ひたゞや也もしくあ等の
記トハ主計天皇の御代を續く前修とかくつと
アレルモ後日天平鳥字八年九月乙巳大師藤原
惠美朝呂押勝連謀頃池畠遂起無及其夜相招堂
与道自宇治李林近江山城守日下部子麻呂右衛
門少尉佐伯伊多智等直取田原道先至近江燒勢
多橋^一三代實錄曰貞觀十一年十二月四日丁亥
近江國勢多橋火貞觀十三年四月四日庚辰近江
國勢多橋火^二東鑑文治三年十月七日條下曰

右武衛飛脚參着去月十九日裔宮郡行也而勢多
橋破換之間為佐々木定綱奉行云、藏國軍記曰天
三年六月十七日仁長關國の橋とがくみ奉り山号立原守
本村改名馬因有十二柱立度同二十四万疊^三百八十
疊中^四の橋板と水石^五石^六自從^七と積^八とす^九室^十
ノ土俗^{十一}ノ皆^{十二}水^{十三}板^{十四}の石^{十五}下^{十六}水^{十七}左^{十八}疊^{十九}
に至^{二十}高^{二十一}幅^{二十二}面^{二十三}丈^{二十四}高^{二十五}丈^{二十六}本^{二十七}は^{二十八}
上^{二十九}済^{三十}令^{三十一}の斧^{三十二}とばむ方^{三十三}の石^{三十四}を^{三十五}へ^{三十六}済^{三十七}も^{三十八}堵^{三十九}
達^{四十}者^{四十}と入^{四十}水^{四十}を^{四十}探^{四十}かう^{四十}水^{四十}一^{四十}水^{四十}修^{四十}

東石垣より下へまでは傍流より移行する平野の
やく、今をのむ。アラシ山より走る支流も多
い。これらは夏行する川と云ふ。又て秋の移行す
る川の事行川と云ふ。又て河口へまではそれが
水を御神のせらうきの義から氏郷、大庭郷の
後院なりをあまへ今が岸とさうしてや傍流而し
民也。とくに多くはかず小四の盛り野にてとも
逐便す。うち鶴の町といづら移行と移行の
中行あらう。第一の店あらうてと流すもう。
大俗、五万の間とよぶ。鳥の弓とまく、水橋筋にて

小内御子ノ事と三保乃事と名づくものハ渺々後名
書焉れども多聞より久保も三保もかく無事一也る
小總乃事西山之玉露義公事水而年二百勢多
移折二年自後乞候長の事に移作送の事。年々度
之ノれど回教をアラム万語以事と云ひトモ語ニキ
度ニシテ命うつて聖丑の八月行脚をさへ至るの年
四月ナリ。源始化日既二百三十日。高麗乃ヨリ土足立
候右鳥山川傳至つりを草近寢カ丁巳年仲夏云
月ナリ。行脚口ナリ。源始まひ多羅尾四事也。此
事は復古英君口僚内井はもうちをひむらとす

監官シテ之錦シテ甲戌年四月丁巳後日正月七日
始より石國吉良平忠四郎等高英君高基伊達
守村毛利秀信等一て監官シテ大膳主事由七年庚寅文
十三年辛酉正月年卯月十九日而以奉行西文
左乃日向秀之三英君夕五石口打御馬とて
監官シテ上京十二年卯月十九日釣多門分ノ四月
終而平山向名伊藤山川十日とて五日と算
り至シテ鶴峯文集曰勢田小橋三十六間大橋九十六間
自橋上望見石山寺此處爲古戰場者數矣旧記勢多
或作瀬田昔忍熊王與武内宿シテ戰於逢坂敗軍逃来

遂沉於此按此事記壬申亂天武天皇大友戰于此大
友敗死按夫天武天智之弟也立為皇太子大友者
天智之子也任大政大臣執國政群臣皆屬心於大
友故天武不安之而出海賊逃世爲僧入吉野天智
崩大友欲踐祚天武出吉野赴東國催兵遂殺大友
而即位夫天智崩天武既辭歸佐則帝統非大友
而誰哉其天命不遂者時運也舉世以大友爲叛臣
痛哉藤原押勝被孝謙譴責而出南京後亂欲赴東
國至此時官共豫要之渡橋シテ絕不能渡之官兵追
乘押勝慟遁到高鳴死壽永亂源賴蒙源賴朝之

命入洛討義仲。義仲使兼平屯於此以防之。其事見前。未久復北條時房、義時之旨侵京時官共山、田次郎、重忠等張軍於此。未畢一日官軍敗績。東軍入京建武侵源尊氏自閏東來犯北關。那和長年陳於此防。之東軍競到長年兵散。般京。此寺皆係於天下。廢興。之臣相。之。一世。佐。之。多。之。一。遂。臣。之。天。武。を。の。く。正。統。と。い。歎。也。か。く。一。寺。と。鶴。峰。林。と。の。論。セ。ト。外。や。く。帝。流。り。く。大。な。た。く。モ。天。命。遂。了。る。よ。川。除。カ。ア。レ。満。も。ミ。ア。リ。ア。ハ。サ。ト。ア。レ。満。ア。ト。水。戸。源。義。公。史。教。レ。連。立。防。儒。臣。ナ。ア。レ。大。日。本。史。と。編。輯。

なき、いかほどの大有と本記と連れて也江乃朝延大夫
と記し、もは源氏の二船の帳風塵及水邊も附され
りが、今朝の初意を以てひそひ一日旧史の事文
を徵して、さく本記と相又天下のう備を運んで
太友帝記の海賊も書かうるタリ万代石島の確
論と謂す。若ばり然て天津日嗣を天より允
り及ぼさずか、其事一今感歎ありまくる際である
事と記す。

文獻

元朝

林ノ枝も芳しくてこの香氣代はれし勢多の長

長秋深葉

至所やタ次乃まうす絕小の高嶺も了勢多の長

風雅集

重ね物を之に極す至所は勢多の長く一音もとくろて

拾玉集

雲深望の尾元りあく不乃之てく勢多の長く一音もとくろて

出停於櫻使つて五色水もとくろてくもとく鳥

九芝彦々毛乃曙日
近いとす御内乃モモー哉これと思ひ望みるる代の時
山崎吉行

大津打出向東天眺望行々詩句聯、一章飛舟淡
海上、孤松停傘韓崎邊、不知膳所由来美、麿見瀬
田多少鮮、此是古時攻戰地、兵亡誰興、沾幾先望指長
橋、到瀬田、青龍卧浪素商天、秀鄉用力異周處、却為
蛟蛇射馬茲圭加神全集

高きと云ひ住む乃瑞紀の自勢多様も一毫も政府に
さうも先秀の聲多様上とて諸君の事、堪能と稱す。之故
政府よりも祐也と玉歸乃紹あはば其如之をとせらる
事ハ勿考多忙の傍トヨアシ古モ乃公其社を施主ニシテ
下格始乃新ラリ宇治宿の傍トヒテ當推の社也。國
事多うと云。古傳考引自序ノ神也。至ヘミシテ御
子ノヒツクル。亦多忙と傳唱トテ。其れかトシテハアハ
秀今若セと語り承。ノタクはアミナカノ別称ある
ニシテ此傳始乃新モ乃舊也。神也んと云ひま至ヘ
テ原之化と云。波羅地諸王と云ふ。不況其事。ノミニ

1

字の移動に本と別れるが、永宣集等上部は、宣府
贊せぬ中古の傳来語多様性を示す必有社と併置
以て、每年二月朔日神祇のちんを同音名と塑んで
其下に祀る。

四

秀郷社 神主の社と並び江戸の秀と名をもつて
號を有すが、此より其所有者を曰く「秀」。民の子供と子孫
と曰く「秀」。家系中、慶生宇勝の柄を和姓と云ふ事有り
と云ふと、子曰く「柄乃多く秀也」。秀之子の社と曰く
「秀子」。秀子の子の社と曰く「秀孫」。秀孫の子の社と
曰く「秀玄孫」。秀玄孫の子の社と曰く「秀玄孫」。秀玄孫の子の
子の社と曰く「秀玄孫」。秀玄孫の子の子の社と曰く「秀玄孫」。

あらうして世人皆より神と稱れ大和神と尊言をす
人皆神と呼ぶ者多し神と稱す事一とほすては西山の御地
み付れども、蓋あんとれ事と、然大和を御り付進まき
シテ、より23年程付進まとい必付れし所を往ち乃
緑紀か曰高ち府乃軍秀令給にハ列事御前四名村乃
くせよ付すち度入と付とゆき甲斐と改と信氏
とちるとつ)其先ハ天理の摂令下ノ苗歌ノ男とトサウモ
若云カ立男伊賀ち差坂經坂あり)苗歌ノ男とトサウモ
はと子をほの男とゆきち材能とよ材能と聖様席傳
ウセと事と考へ給は故ニ考々智^ミ力絶特うむと
是

前後より、高ひり也上也、てたゞ佛はと付、圓満
清人是十代號號元之延喜十八年、或十日也、一說
云ハ、先首院の承平年中、アラムトメトモト考々内移以
ヨリ、ゆきて、日因乃わく、アオガルヒトモト、眼乃光也、シテ、徐
メ行くを、孫アオガルヒトモト、他も考々吉原の土也、而
シテ、地を跨ぐ砂也、モト御ノ、僅ニゆくも、一ノ海トモ
ちよ、亦と焉く、アトの事と大思は、ソト多く地をさす
大蛇ちよ、勝多の精乃不、任シキ、テ、子時年、(此も)、故
被取多く而空馬體乃布、害せしは、勇猛の人々と

お心と執さんすき敵手よの多幸とまく君うらやまくと
そを君取くハ我多心とひくへ青々許汚れた後で
ゆくと空はとあきるか沙とふくとくの門の口の前
七宝の並敷膳とそく飯あらわしく人る乃極うら
れ社主水府の棲うらかとあきらめと化參とほくえ
景もにほく皆曰我心よしと佛も即ち心冥黙
嘆詠と毛根と毛根と毛根と毛根と毛根と毛根と
それと毛根と毛根と毛根と毛根と毛根と毛根と
わく悪くせり併と山海七巻本まつて是ちと秀
今うながれ矢張ほひ竹面と毛根と甲とごと自若と

とて並敷膳事ふ多々賜と張憲とゆくまくくと
うちの御小馬帳と喰休とあきらかと因て失をと
小鳴とゆくと是と前と後と絶不應して多大の距たり
寒くは震動し止む不盡とて百足の馬帳うき写の
毛根の多くとておの不盡とて多大とおとと
ゆく今日の月敷とと十枚の多とおとておとと
ゆく不滑油煙太刀腰羽金袋の多とおとと
とくとくおとと男路鳥の格の多とおとく疏破天と
歎感の終り怪王佐下と叙一と壁の御代傳と經と
しづねよれと後年董を乞ひあまう平將つと

うち後四位下取一石壁我之をうけり——後年
の四年とあり百足馬根と附こむるの旗長は八十歳
當ふと行つて少少の年を経て儀湯還ち南をゆくの家
と傳へて後は望ち奉るのみ。但事はゆかず。其處にゆく者
庸々其鄉の源中野大和の者多く太刀を拂ひて行小車
納一錢も三升余り易修は今より車二軒の御二本ハ
水原の車一本ハ多々の主事又傳へて車行ノ船之山
主事主事は車の主事也。主事の主事は御内侍始終と奉と西子
の御記とれて如之年奉る後日親日達山道人題と
云ふと主事の御記漢文を以て書——(卷之二)合計

西の諸民多と往來をもと呼今事アリ始めや
其ノ事ニテ多々アリテ諸多事の事後日人を更爾し
紀元後迄書く事アリテ之をもとより其源小也
て是を以て古事記傳用ト至れハ左ノ如て此多々
御事トシセマツクトシタキニ得ニ信近多々る
傳定集院院記載スルヒテ院院記多々因テ院院王
主の傳記多々於ト書國中トニテ也其の初ウラ方
れえも院院の事アリトヒテ院院ト入セ
名シタトナリヨリモトヒテ院院セテ君のヤク
差ニシテシテトナリモトヒテ院院セテ君のヤク

人皆知蛇之害也而不知其利也
惟南子註曰蠟蟲也性能制蛇見大
蛇便緣上噉其足王漁記曰蟻蛇制大蛇云之是也
以之及之大蛇必僵仆而不能起亦如之也
已而役十役之貨ハ東邦中世の矣紡うるに既而小
童と同立事甚以之止之或汲水者之於之
手て擣かば一袋毛中灌毛中灌すの泡子ハ持て行書寫り淳行毛中灌
毛と字は毛中灌行書寫り淳行毛中灌
行書寫り淳行毛中灌行書寫り淳行毛中灌
行書寫り淳行毛中灌行書寫り淳行毛中灌

侍ち刀を伊勢乃の本船のまゝ、侍是佐野ち、余流足利
鬼頭、後胤アリ。之は多めと賣出で、御事と云ふ
ところは、そよ湯と並御事とて、近墨のまゝ。一
はるか氏と稱はれて、御事御用ニシテ、御事
程大方商賈もしく、考セモ、御事御用のまゝ。アリ
御事御用もしく、御事御用。一や、御事御用起。取
而リ、秀々、旗とて、落小山、御事御用もしく、御事御用
乞ふ。御事御用もしく、御事御用。大ニテ、亦古一、常人の射
ヘテ、ぬ。あくへり、相ノヤー。相も射也。アリ。ハ
えり。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。

尚矣何れ時代ノ船橋ニ詳シトキニ銘ノ圓刻及
中主ノ所ハ秀久時代也、秀利ノ御子也、臣子也同
に奉仕せり。之を序シテ曰くは歎き中世痛生氣也
猶も不仕事也。秀郷ノ被也の行役也。今時
多情の人抱く秀久ノ歎と稱。是をうその事と
云ひ本波峰ノ本多・赤門傳記ノ是也端々
怪矣。もとより秀久の死也(記)詳シ。三井寺の條

一
雲住寺　勢田橋の西を流れる河を秀多川の源流
あり、越後山南支流雲住川とも云ふ。室韋源
氏の居城。

源氏家京を山一人陸路町邊の車の馬とて向
屬生アリノアリニモ一色御起一毛アリノ滿田傳多
ト御多也滿田傳多トキニ良也商生弘乃臣くそア
御起之秀之社ノ陛下ノ御子也

移本村 勢多橋乃東神社にて中宮を云勢多
綾もよそにけむの年く江張次翁曰近江國福善剣
勢多驛（アシタカニシマツ）橋抄抄也勢多と號の次と記す頃
和名抄也勢多と號とあると延喜式く近江福島
勢多之平野（アシタカノヒラヤ）栗本乃里と云勢多乃
里と云也せ他乞之也

金葉集

漢人不答

りてよ名を寫傳へるれど、うらうらと雲
は移もす。局がまくゆき送歸と云謂勞々無
間きせば、乃ち多きも、或書曰、年中行國東方豐
銅便無恙通懶因、
一妙要寺、努多勝浩の少くも、は年家京け性ちの
事す。

一西光寺、妙法の少くも、西布創寺より國風院
寺のあらわし、日本國近松と云記也

一青嶠寺、西光の少くも、天台宗根本大師の
不老山、初盤院寺とすと、近松と云是爲乃
事す。

近江輿地志畧卷之四十

栗本郡第二

一
院江庵　雲位の方面くら）京小説安守内西原院
主憩息ノ所シ是別山是美作の名院の石碑也西原
院の天寧ノ和室も淨有天の品臣ニ松氏アムケ宣ヒ
城少く庵院とらシ隈園と名院アモ庵院の直徳アリとも櫻書て曰
仁守主納トシシテ祖多院の直徳アリとも櫻書て曰
朝敵左文部更修太守山号を宣院之像

重慶大後氏之忌而居之者左節至房（自建武中

秀江別勢因之敗主而劫燒之景隆天正十年六月惟
 任日向守芝秀兵信長既止信忠於京師遂欲備安
 士傳而假道於勢因至隆及於景祐相隨出勢因橋
 相禦忽換其槁矣又因城守備鳥銃礮砲之往來
 芝秀彷徨無所於張軍却欲黨至隆併力永援成其
 仰即遣使諭景隆曰子若反心屈我則勢因之敗固
 無憂而黨之系地亦其望矣當速諾因貴令一人出
 貸系隆答曰我主義焉豈汝殘賊之後而永汚忠義
 之名乎即還其使芝秀怒忽失其策於是將渡湖水
 而艤舟系隆竊聞之悉匿湖中之舟揖退其濟却又

伐湖之師是故彼士卒半敗北芝秀多方之而不克
 前遂退師於坂木其年東隱神君尚在和泉搜爰還
 師三河時景隆及景祐相從警衛戎御自勢因至信
 樂其路賊徒間作而ざ障 神君之師景隆輒芟
 之平之而兵路以寧於戲景隆之功亦不為不多矣
 兹欲述遠祖之功業使人圖其像旦成辭曰

天正之年

克昌武門

節義忠盡

延裕後昆

徒丘佐下山圍遠江守伴朝臣景祐謹謹

昭智軍紀曰芝秀已子之信忠之子毅之子也
 乃傳之行矣云乃所據之小城不以者叶

少翁居馬久光吾と名乗る。至る山傳ひ約年同
友之也。仲高あま木主中源花賢四王天又無御政寔今
孝部入奉正二宅用房の葉軒下之ふ竹蹊と移築
於此勢田佐土山是義修ひを階山里とす。此所不
多か。而てはく跡をく勢田山也。勢田鶴乃峰万松齋
一往處と移築し。山固小身す。一報之及次
志。因上の事。川入。家忠日記云。神君之象
壞く。而張波を少翁居考。五連三月。信長之侍忠
伏株の世後進を。傳へ。縣守源川を越て伊賀伊勢
山路を経て行路。國立。勢田陽主山固義修ひを第
多陸主。野村。野村。津。津。津。勢田の鶴也。

對馬ち。勢田乃。海。遊。島。山。海。そ。活。事。内。江。在
の。も。と。道。も。 神君則。山。是。之。事。と。廊。屏。一。乞
際。因。之。作。樂。と。之。休。ま。る。乃。不。と。近。鄉。乃
一。擇。起。之。活。之。屏。と。ア。墓。江。本。敷。座。及。之。
山。是。之。事。も。と。遊。拂。く。を。と。手。拂。す。と。拂。ま。て
是。の。不。よ。は。是。之。事。古。仰。と。之。急。不。可。う。と
廢。也。又。曰。少翁。之。秀。之。信。長。又。多。を。數。て。少翁
多。か。と。算。一。五。五。一。卦。勢。田。陽。主。山。固。義。修。ひ。を。第
多。陸。主。野。村。野。村。津。津。津。勢。田。の。鶴。也。

塞北陣と整え芝秀と三日
後、武寧へ也。伊勢と退き坂本の傳へ入
り、留木と留木舟と御船と渡り西の
御船と船と山尾又と伊勢と伊勢と伊勢
湖水と鐵と石と川。八年後利を失く門近く
山尾又と伊勢と伊勢と伊勢と伊勢と伊勢
拒ましとて有り遂に伊勢と伊勢と伊勢
内とらゆともかく又曰立花左近乃監連後小
事にて落成の傳と在り。と以て之を伊勢國
名後以後傳す。

一山園景隆墓

山園景隆墓
以江名以肉山景多風の墓也
ソレを清して古之天寧和尚之碑と和也在
せの日石碑を更んと欲して一事不協可憐和也石
碑の後序と作る其序曰

夫江州勢田古城跡者山岡氏作州牧景隆所築城也原以景隆者景行天皇御子武持昌祚大伴姓始仕大臣後胤黃門大伴家持之累世也其雲孫改姓号山岡氏尚年於此景隆從末總見寺殿贈大相國之家臣而相國每階諸國敷城無不令一人當百奇兵被堅甲躡勁弩帶利劍樹其軍功故景隆平日

知我不羞小節耻功名不顯于天下也相國感忠義
賜參邑地一万亩堅城深溝高壘堅營寇前不得開
劄又護持勢多長橋多年也謙曰惟仕光秀我相國
之日景隆扣馬於橋上欲待信忠公率群兵^{未上}后来
供奉安土城頃刻還而夾橋防戰^時光秀首令之奉
獻下光秀急圍忠公於京師卒自到矣告急如矢
景隆咬齒牙而自惜耳不日而精賊欲使士卒於奪
安土城過勢田橋口景隆防戰燒落於橋精賊卒不
得敢前陣每欲渡于湖上景隆率士卒於湖上切擊
劫於咸疆敗北虜士卒所殺亡不可勝計退城以來

城破敗而農夫不輒耕繹末日用勒已量之所稱四
壁嶮崖數丈不知重^一綠老樹其數含抱蹲空城跡舊
是洛納龍室山主雪庵和尚之菴跡而為烏有其來
尚矣方今膳所城主與^一野衲結方外之交三十年于
社掉三寸之舌^一來^一荒裘之地^一於城主堅點頭以望之
投畀焉以故相^一攸于領內^一是勢多古城跡地靈住境
也貞享甲子齋之結^一三間茅菴^一名臨江瓦灰不然無
敢一箇銀廬^一內外客至希也不詣有扣禪菴^一未底^上撫
敝衣見之曰吾這裏無一物慈悲食示法食既對庭
前浪花者思^一南泉指花卉殿開澳船至蒼者諸客頤

掛渡挽開又野航未庭上則舉揚百丈野航公案杜
大吟門外則聞示趙川狗子詬頭善友諾鳥侍者群
麾朝草鞋跟底踏雲暮杖杖頭邊擣月無邊勝境入
眸未忘意於世矣閑吟幾霜字哉顧是景隆弔祭不
至精魂無依追憶遺蹟更於摘星壇上建石碑以記
之後未具眼正誤焉為之銘曰

石碑高秀 翳見山岡 俊雅豪傑 鮑握鐵捨
後殿貴勢 武門揷栗 燈落擣術 掌握將量
名聞海內 咸震諸方 計攀韓信 忠等呂望

戮力尽力 不乏追乞 是雄大事 志高氣揚
技敗尤虧 圓存餽糧 一靈未也 露出堂々
禪菴智鑒 頽獻茶湯 敬祈雨々 仰日暘
精神進林下 生功德查

元祿四歲舍辛未五月上辭館江固墓賜繫比丘暮齡稀年

守株子天寧達云

中山川 是臨江菴片南流至小川也源以山半
口引之北之水南流之爲江考其南流湖水也
中山川之石多磬石之半也此經所引爲小溪

神竹村 先哲之村の川也移とむの本也

傳古達御明神の村國の地處へ民名する事

一達御大明神社 在御竹村社置の大路御東より
おもて社有地より高く坐して高下にちる所
の御を送命也送命式曰坐江國栗あら達御神社
也一宮神曰達御神社大貴命令ニ徳一休之江國栗あら
高木梅あら小出江國一高木也一宮神の高木御
社を櫛あらう國の一年、此二木を國ノ小出の山の櫛
木ノ木大社を二宮ノ也もあチ六ヶ所大社をも
神天皇天社地神社神座を立つ所も大社をも
事の一宮ノ也又一祝大社ノのま地社ノも

ヤシノ木の木の死しようともありまじれを乍ラ祀
テ波二宮祀ト近きの祭事ノアツテ兼石の社を載さず神
社若葉やは一乃幸ノ一ノのり復神ノリ非竹ノ也セ
利神道名目敷張ノ曰一宮のもの舞居也係衆毛を毛ノ
足毛ノ也ノ或祀曰達御社ノ大國栗社ノ也
大社ノ小出ノ玉出玉川ノ坐玉移坐於
あとかくとゆ

三代実錄曰貞觀二年二月辛亥列於官社貞觀四年六
月壬辰八月己未授從五位下貞觀九年七月十一日授從四
位下貞觀十年七月壬辰朔十四日壬午授從四位上焉

綠起曰社司等謂官數二字傳言一宇者正數二字者權數也或云加天明玉令為二字未知何處按述考式凡神社至以上者書其數一座者不書其數一官記亦以為一座列與當社傳有符合矣三井記曰是於明神使者革牛馬之革薰神註曰天明玉命也天武天皇自夙罪也請于其每年正月自元日引七日獻神饌矣自古禁奧鳥而祭社司亦不食之也八日社司等會食而御食奧鳥今鑿貞鳥社司亦食之八日加年志也寧原里支字下詳醍醐山科謂勘請釣安日社司等

會食而饌宴十七日拂弓之神奉二月初午鉢神饌三日總的之神奉神於村人會合而射的四日移本村人勒三月晦日拂石聲回揚口響大河村中也方良里人嫌逐後

四月初午拂鹽連辛亥祀拂鹽遷幸於拂鹽所無拂神
祭首時拂鹽移連鹽奉美祐矣正月二年拂之神生木子以植立事同月搬吉向拂除社內九月土首相
搬于土首拂立拂事十月廿六日拂歸之拂奉拂臂
列立日拂事奏拂樂十二月二年拂史燒矣社境內東
西半面南北之面也之半面可四方也社領二千名之
拂綠起一冊拂事拂主春祭信五偏祭主
百色也權中納云為祭之通拂之禮有主故日天已貴
命者金佳備之神而其威被于天下故号革牛馬之魂
男号八牛文神且其詞云遠而良有以哉鳴呼講武

治那々人言支不尊信耶き拾芥抄三十叶名持中
古六日建永、執載主保元わ治相於焉事、纏
渦若盛安と大作りてトキリたまへて而く空
聲國は移りて舟のむかに傍りて空
会若くて打送、もふ御社のえりをうめらゆ
ヒニハ西へ義弟の明神より佑夏、是は今更には
詔亦通夜して行路の行をロヘモテ社便あす
あゝ車席あおる車井車並小瀬朝勢多の馬を
走りあくつわよめりむるひと同ひて東都の文も
八橋を泛、奉公社せうと頼朝の子清少にて社小

通病、久しう居守、席を夢乃奉とぞ、久御傳
手もと御あるもと、かく金加草云前障構松風色老賴
鞠弓は役精侍、盛安を酒同て化、伊豆か心を漫緩
安養寺、神代より傳ちるが多て源義隆乃奉と
勢多中山、毛勝本村の内、毛勝山主として伊豆
りもとソリげ所乃土筆名多あり
松谷川、中止のあり、中止の川也
大谷川、あり、川乃中止あり
地谷川、名多のあり、

久留村 邦伊村のゆゑを枕く宮ほにとんじてはも大に
ひの才く右食く宮ほ禽く事ヤーしせ宮ほに之事
をも「或朝く左國乃巨網進之納宦禽故号
宦大老」と云ふと云々ナ大隊乃御^シミ^シモ^シ包^シ乃
網^シ巨^シも玉野の佐食く網^シ絆^シ溝^シ都^シ
缺^シト^シ奉^シ大宦にとんじておにとんじて貢^シ於^シ君^シ
川村モ左^シ宮宦食^シ二^シ田地の字^シ人保^シと^シふ^シ也^シ

一 正一位若松大明神社 五日社と人皇之年代歎明天皇
乃開之 鎮座多禮每年四月五日 井田と号ひて地

このうち土佐ノ主少林の清角がすこし
一 前靈大明神社 口村主之彦庄の年記不詳 迎文立年
月は八月再興をし毎年四月十日神主と左恩ちと号
セミナリ

玉豐浦 はまくとねり 玉豊くよまく 豊島ノ玉川
イシマツノサヲセシ

割効擇

色く乃葉の声を切るといひ聲の音と月はいの
又玉壁の原より
支那ノ俊憲

一 西鷹寺 リ村三と天台津が仮本西義寺の事す
一 久至正長七年宗珍乃用山寺

一 西接寺 リ村三と石引中興と慶長七年宝慶の用
一 山寺

一 浄香寺 リ村三と佛ちふをもとへ一久の事す
一 中興

一 明慶七年宝慶ノ同奉

一 善住寺 リ村三と佛ちふをもと海藏院の事す
一 中興

一 庆長七年傳法の事す

一 魁藏寺 リ村三と佛ちふをもと海藏院の事す
一 中興

一 五年宝金乃用山

一 正善寺 リ村三と一向宗奈が佛寺事大善院の事す
一 中興

一 庆長七年道清の冥墓

一 竝州寺 リ村三と佛ちふをもと津顯院の事す
一 中興

一 五年宝金乃用山

一 行慶教 リ村三と号ひて比とおほ石りは師
一 舊くせんと寓居とし
一 臣居多々ありハシナヒ
一 俗憲清は師
一 一年錦金を下り和被及弓馬のを
一 作る年を多く付け比と仰歎すや石群
一 四女ノ夜立
一 小夜の里とゆひもんとなりま
一 うかみ早ちやアハヒト吉乃小

ほくちとけゆくよみ松平伊三守の経法

猿乃門田に極てるる至ニ矣ある。又この船
はうちの天より房割とひびきの御事と申す
よと誠乃とくめくすものねくヤマヒトモ
地藏山口すもお傳説をうかぶと因く号とい

古跡跡口すもお傳説にあれば甲斐多と云ふ
中世山園義修らは跡して山園村馬場景祐家居住を
高橋川土俗是を三間茅庵ノ川と云或り大蔥川と云
源と田上村の邊アリ。勢多ア山向と鷹と達
部乃社の傳と傳と注記のち既とある茅庵のまこと

大に大蔥の傳アリ附てすれ川一石と
長は川と云

一大蔥村 大に村のゆゑに村と申す内駒井庄より
大蔥村と称する地あり口名多村と申すと曰ふて甚
しきし駒井の庄大蔥と土俗の大蔥と申すと正村
と申すと多く角村と大蔥ひとと大蔥ノ川呼ふ事
大ると大とせと云ひ故に

正一位九大臣社 大蔥村と申れ毎年四月うるわの御
祭りや駒井二き駒井月思事とあたはりノ経竹城
を第と初向とばげふものづきと云々也形の又名

至トシム

辨才天女社 リ村ノミ

十禪寺社 リ村ノミ

坊水天神社

リ村ノミ

（前略）此後今の如き移りてありとばく活泉ありは水をねぐる事も効驗を以てるのであり。故坊水天神の名を回地と有り。又水を以てすみけある天神乃耳。物もあらず。今之行

丹後侍従塚 リ村ノアリ。是れか人といふと之れ今之行す。御城ノ下に在る人か。

東光寺 瑞瑞山正善院東光寺と号ひ布多の藥師佛長
三人三寸おほび竹石大伽藍地ハヨヒ土民山色の土才を穿
く石瓦石錢石等を佛殿大堂を以て之の事

善念寺 回びしより一向宗玉教奉の事多

万福寺 リ村ノミ石碑

通德寺 リ村ノミ石碑

常樂寺 リ村ノミ陽玉家有智覺院乃第也

月輪池 リ村ノミ信遠寺と上月輪下月輪

二池あり。又山神して地なり。修正一石。モエ。工俗石傳

石音月輪源。ゆく入る圓く。多ひく。臣御寺ノミ

石を先月の水く移アリテ本殊ノリハ清濁ニ
別ナシテ月光ヒトト大明松懸午紀の御アツト差又
月天子と號レ地乃中古ニテアリモアツトモシテ了
奉之天地始てより以來變々ノリ經理或書云月輪
禪定尊天ムの在園邊に宗本教ニ在ルキテ園ノ里子
役在園内中育一池有るがト月輪の池と云加キ
名ミ自輪池中ノアシヤダシテ之役ナリ

本願堂池 日村ミヒル上至下比トヨト池有ル

鳥川池 日村ミヒル上至下比トヨト池有ル

織部屋敷跡

日村ミヒル上至下比トヨト池有ル

アリテ其後藏於中古ニテ賜スと云ヒテ行リテ其時
の憩息の地ナシモアリ洋

高山屋 日村ミヒル上至下比トヨト

正祐跡 口村ミヒル上至下比トヨト

南室前 大其村の少ホモカナ

天滿天神社 有其村ノ多ニタれ毎年四月物已日

治田布神社 口村ミヒル上至下比トヨト

少ホモカナ 治田村ノ治田の少ホモカナ

一 桂園 あリミテ口村ノ桂ノ木トスを傳ヒテ

未シテノモ

一 蘭才天社 リ付とおにをもあ天のにとよけと大
ひき傳ト行

一 老上川 ば川をばくと以テ土俗傳と大龜川とす
猿川とえむ非う川中二十間もる川下にて長弓
川とよひを老上の御なりとい川の名とて原々
田と牧村の山間にりかと乾川流と荀多村のゆと達う
矣移はば南とてくびり入り川甲十五石とアリ
てモ二千石の竹と及御毛小砂と常ハ水ナリ叶
一 てモアカシア行老上御の名を以テ和名也
老上川中一ねも長さうねと云

一 大日寺 リ付とおにをだりめまちんの竹と西子、渾室
ノクセ付は佛、付古室ちりをそと室と付く後此
セ、船とそと船と付く後ト、船と

一 箕谷の跡 リ付とおにを付古室と付く是て
左と右の御室と付く御室の目と廢絶と云今
御の壁やして大石面付とて立石と宝塔のと
柱の壁セと付く是方付の石行と傳と蓮やと
事と付く田代うもと付く御室と付く付
紀の付とさとあ笠川とつと付く付と付と付
付と付く付と付く付と付と付と付と付と付

國をし等都 等事付又其もとよりも多きと云ふ

らの間)是も山陽紀行もされへども

一 裳裳拂衣 けむりのたぬの傳ともお傳ひは大

師笠とサケノヒトノ

一 粟林山 田村山

妙樂寺

海安寺

新宮寺

八大將王社

たすく

一 高声寺 田村山石窟之度子年同其も其
治工京縣所の圓心寺の事す

輿地志畧四十終

近江輿地志畧卷之四十一

栗本郡第三

矢倉村
やさわ村少子のり事はほひのあてはる
はせとま金とくすの領くつとくらめなじいと
みの見ゆ紀し孝徳天皇諸國多底と起一造ノ國
石の刀甲弓矢と收襄うゑすとそくされば北
京もかく古昔の多底行一此と後世文字と改
多底くはくや町を刻す田町古町小町とよ古昔
ちげ良家院をより居をす中の中の地名稱は

トトロ跡のゆきかくにて草はし並ひまは川を
候とく門もとあは川邊を名少路とりよ中せ遊女め
歌しましていとまし今とも

一 古傳跡 お竹土佐さす原大連葉く所くとは後行
用

一 昆沙門堂跡 一 觀音堂跡 一 繹迦堂跡

一 極樂寺跡 修了矢食村モリカサ行古寺舞多のうち院
ナシと廟に之多大ノ繫り急く鳥有と云々今總
ノ田島の字モ此云ば金大门蓮に達接キテ代寺の義
み送寺の名モテ在ル

一 若一王玉宮

多食村

一 八幡宮

口村

一 稲荷社

口村

一 立木社

多食村

神去龜趙命神護景雲元年左使小原次ノ銘

六一ノ弓弓持免ノモレノ御内左樹今ミナムニ一位

立木大四ゆ一トナミ立木の名をノ称セテ至れ無年

四月物の己日ノ室龟八丁己年勅と奉事ノ中臣法

急社と送多喜て延喜元丙寅年丙一位の神階を授
らふ之をば社立木ノ社トセ也ト後化尔や中世

一
春日社
ノ右近所ノ御事ノ主モ神幸ノ日御宿アリ

一
養蓮寺 东平劉子翫之和
達之多傷

之專子。有寒之氣，則全芳而反惡之。乃至我

東京御事。之和也。達

芝傳手 葵義也卷之四
金後赤松子書於芝傳手
芝の爲て接する事無く四方芝傳手
大窓手書
芝釋迦手書
納也悟金猿ちくゆ
芝傳手とちくゆ御事手記也了て號矣
今
終て再興の爲め居立て本初寺院のまゝあら法
略山芝傳手とちくゆ

一 正念寺 淨土寺へ並び正定寺の事と考へ山根取
院正念寺とも云ふ事に建之たる

草津村　近ノ村ノ少々を東海に立之の跡也

旅店をまわり竈神のあたまをくわへ駄馬を下の荷
物貴重の割合を江戸よりよしは品川駅を改め江戸
よりあるば駆けりと改じね村を留ま川と云ひ易き
川舟詠様多乃種敷うけ地乃古戰場を擱むるを
亦當と申す丁目江戸を以てとて近すの不持木内義
兵船合戸勢之方々が修造と行ひとと所とてお良
幸はれ松十郎を正源弟傳と傳を江戸にうき地
布をうながす山にて多ひ事くとて夜乃時敵陣乃
ちとて大矢を射拂へ革津と號と號を拂ひ
乃方へおうじもを拂へとてとて敗少く

名文集千首

草津川の傍に山あらひや又圓く山志賀乃御舟
競舟道の紀云

近は秋や秋の草野は名のとて遊戯の代うく亂さ
無加草云

雨寒、野路隆原邊客被渡霧西望天忽記古人歌詠
得感吟行到草津廊

一
志津川 是之本のあり傳を説くかと云
しのと並く有名志津川と云ふ志津川の名と接する
源もまた地の流れ山の流れ曲流て立木松の傳を

立木山田山の傳入

一
常善寺 草津川の傍に之ノ縁起曰 芝仁天皇宝龜
八丁年冬天下旱帝勅住僧令請雨講讀般若三十七
日明年春大雨 帝悅詔曰自今可祈階下宝祚延
長造宮佛宇而賜常善之号開山良辨僧正天平七
乙亥年三月感昇堂八月建立功德院御宇兼久三
辛巳年五月其亂東移入焉寺本尊多宝物等教失
中興宗山寂尊上人後繼真正著菩薩後宇多院建治
二丙子年四月移住常善寺七月再興移本尊今之阿弥
陀佛同十五日布薩戒執行從此時傳真言律法等

持院殿尊氏云正慶二年丙午上洛之砌御賴勝定
院殿義持公卿願應永十三年知行之由統在之光
亨元丁未年義尚公陣于郡之鈞邑爭當寺住僧尊
美令終延命地藏法延德元乙酉年於鉤之陣中薨
号常德院殿遺命曰我歸常善之地藏既久死則殿
寶皆以施彼寺依之賜彼殿室今之客殿是也信邑
之先代不相督御願永祿十年而行之由緒同十三
年制札有之太閤秀吉云天正十年明智亂之砌制
札有之慶長立庚子年 大相國家康公閑々原御
室碑之砌御上洛九月十九日御津于扁寺御在碑

二日諸將擒石田元凶賊等來 大相國大悅則
召住倡一秀而賜田畝五十石同日 大相國召
住倡問宗義答奏戒律審衆同本寺菩薩的受而嘗
不難他系故無本院同年九月二十三日 大相
國秀忠云御上洛御陣于扁寺在碑一日召住倡賜
黃金一斤至一秀晚年多有易行易供法事則詣洛
東智恩院拜湍善僧正兼於宗念佛門自尔來為末
葉代々相續 大相國家之云之御代御朱印辨
領自是即當家御代辨領云

一 治部繫松 則在吉野をより松の枝を拂ひ拂ひ成る
一 摺り手をけ松くはれくもう半身をたまちの緑起
一 すくそく石面之風すら別色と記す

一 養尊寺 菩提さうの鈴風山名をもと號す一面佛
多子の東山く緑起ノキモニ正之のひ乃名號す
號名也

一 正定寺 リ村主の佛國山塔院西之うちの雲
宗智院ノ事す

一 二寺

一 真如寺 リ村主の宝樹山毛駒と号す中興住持上
人承裕元年建立塔院ノ至聖之彼寺の事す

一 金剛寺 リ村主の金剛山金剛寺と号すり寂院日光
乃行臺永福二年建立日蓮宗本教立布中の事す

一 玄り寺 リ村主の玄りは西門の宗室天正十七年
建立一向之傳之事す

一 御巌寺 リ村主の釋教是宗室天正十九年之建立
百字文も外寺事す

一 傳久寺

リ村主の釋善徳宗室天正十九年之傳立

之の事より來てかがむ乃焉も

一
新教寺 美津留主川ノモニヨリ墓不詳中鳥鶴ノ領
之の九年建也二向之東かがむ流至金福寺ノ事寺
なり

一
善福寺古跡 美津村四町目ノ田の字と云ふア
一
新福寺古跡 日吉町西三島ノ字と云フ
一
極樂寺古跡 美津矢金庭から村名の墓少之者
乃手跡(解)ル

一
草津川 美津村木戸村於ニモ土俗砂川ノ字よ

一
奈川平野ち水引 多摩川多々少々をいへる

流や前川東少すり重徳川とも一木立少すり草床
川少すり木立少すり有ツカ信樂の山間より北虎
東坂村の東を遡(テ)西坂村(ヒ)上山坂村の北を遡(テ)下西
坂村と下北村の十間(ヒ)御少父(ヒ)セツカ志滿(ヒ)の
志(ヒ)モト下西坂村少(ヒ)アレ少(ヒ)里相生村(ヒ)
上北坂(ヒ)木立少(ヒ)可(ヒ)少(ヒ)川幅(ヒ)半津(ヒ)以上少(ヒ)木立
竹川(ヒ)木立少(ヒ)川下北坂(ヒ)木立少(ヒ)白柳(ヒ)砂川(ヒ)の花(ヒ)木立
竹川(ヒ)木立少(ヒ)川下北坂(ヒ)木立少(ヒ)白柳(ヒ)砂川(ヒ)の花(ヒ)木立
南子(ヒ)妙法蓮華經の塔有三塔寺(ヒ)木立少(ヒ)木立

の所へハ勝也、喜兵衛、とよひのもとまほに宿を設けて居て
喜兵衛といひ重勝院也。喜兵衛の町をも喜上砂川を打廻り
大崎井戻しも御牛山左近利

大崎井戻しも御牛山左近利

正一位女眞權現社 大崎井戻しも御前も年四月
十日也。牛郎也洋

尊人善守 四村を浮雲と多喜の金成守。まキ也

光圓寺 四村をあら二角と西中綱守。片末見與正守
〔代本守太列〕

牛津村 大崎井戻しのあら二角も。太列

菌天明祐社 牛津村禁多多那部と洋吉保云立百年沫
以第小劫清也

小松村 千葉也。山東本守。村也

本勝守

小柿也。時高也。東條守。蓮守。本守

東方守

因村也。古保年守。と多岐り。かく守也。

あら牛津也

坊管也

小柿村の東小守。も。也

川多邑也

坊管也。も。也。也。也。也。也。

川多邑也

川多村。も。也。也。古跡山也。以。也。也。

方許。地小一。而。七。年。洋。八。第。九。以。

一 広幡山　具材多々寺宇を有すも又は假御侍住古の栗
の木を主に仰ぐて切御して在り。其峰の歴々川にて山
やスアルカイヒトヒシ山を稱とい奉る。灰せきとらの栗の木
よりて種々の高枝あり。信濃と三河の山を洋上を解散する
一 川内村　川内村の栗ある村也
一 畠むら　羊皮の木あるむら也
一 東園寺　尼むら山有本布禪寺も圓基も正慶尊子也
一 滝川村　牛滝村の木土有村也
一 天大將軍社　滝川村多志寺也。澤多礼也。年四月十日
一 茅明寺　因村多志西多利寺也。天正三年寛永ノ基
一 德林寺　因村多志西多利寺也。承正八年己卯禪定圓基
一 以乘寺　因村多志明應八年辛未奉神告了圓基西布教寺也
一 行圓寺　因村多志明應之年奉神禪業礎圓基布教寺也
一 木川郷
一 山田庄　赤外村郷源守村南山北山の庄也
一 木川村　矢橋北山也
一 西邊寺　木川村小なり。本堂前年壬午承正乙未年奉
基ある。深院長徳。壹寸立像也
一 西来寺　因村多志布教寺年壬午開基承正乙巳年奉
基ある。深院長徳。壹寸立像也

一 広瀬山 因材多々寺事記載も又あ傳御傳鑑古栗
の天主を切削して切削して在り其峰の廣瀬川にて山
木立れりより今ト此山を彌といふ也。灰せきより高木の木
立て根の如枝あり信濃と小室と洋小舟解松の森
同川村 川之村の西ある村也

一 畠村 畠原の東ある村也

一 東圓寺 吾むら山有東方御平野開基正慶尊寺也

一 浩川村 牛浮村の東有村也

一 天大將軍社 浩川村多々年承之澤多礼也。年四月十日

一 芳明寺 因材多々西多礼等天正三年御永開基

一 德林寺 因材多々西多礼等永正十八年己卯釋迦國基
以乘寺 因材多々明應乙未奉神告了開基西多礼等也

一 行圓寺 因材多々明應乙未奉釋迦國基奉神等也

一 木川郷

一 山田庄 村外村鄉源舍村南山北山のをいふ

一 木川村 夫橋北山也

一 西邊寺 木川村小なり。奉神等永正乙未奉神等也

一 基布多。深地長野。壹寸立傷せり

一 西乘寺 同材多々奉神等永開基永正乙未奉神等也

一 畠原山院立傳。豈知不二十九

一 最明寺 四村所有本多郡守主守治上使年 國基
あすら院立御事

一 德照寺 四村所有本多郡守主守治上使年 國基

一 あすら院立御事

一 第完寺 四村所有淨慈慶長二年 國基もある
以院立御事

以院立御事

一 玄門寺 四村所有名ゆつ天の像と洋天女の像有
三八立傳並天神の像也あり正月守り。國媛大師業
度急長封人守り傳教大師の像也

一 天國寺神社 四村所有多神若五相の靈廟奉事

年建立年不詳四年四月九月十月相接正月七日勅
請鉤社の左上白楊社白土社を總祀、未、有事奉事
不載

一 白髮明神の神木 四村所有櫻なり有小名を美夫
木セリ。本川村立御事

一 三ツ池 本川村立御事本川池小池大池
て里號り大和之御年は此を場所古事ノ二町少町と
併上池の地東西四百八十間南北六丈有

一 市倉村 天保七年の元本多郡守也朝鑿泉載上
少主王の御令事のちに本多郡守也大和郡守也

國の祠貢を祀り大藏主が拂倉山納じ其日拂倉山一地
せれハ今不拂倉也ソ也

一 淨顯寺 撫倉村北ノ山ノ裏長治年正月奉事奉事
頬守の本代也

一 五吉大明神 因村小寺眞之子正泰己年正月廿二日高
社より勅請也

一 南山面ノ山 本村北山南山甲は馬場
サニ原跡唐村をも

一 善勝村 南山面ノ山 本村東光山善勝寺ノ支
安治年清乃は師の因縁ある所也院長也ニす立候

一 道大師の旧東平野西村平まちり
一 西界寺 因村小寺も此也西界寺平と云ひ東平野西
村寺の本寺也康正乙亥年正月廿日拂倉山納
は危き傳より平ノ寺也後也而御の立候あす半ナツ梵
大師の像也古傳此不動も平ノ北駿山西谷西界寺の本寺也
奉甲の堂より湖水に況りもその後此庫の獵師の洞山川
て其れも奉う西界寺の本寺也一ゆゑも此も西界寺也
又ハ年是經刊の後立左近藏於正三月朔日奉事奉事
獨居寺の本寺也也も古來て山也との凡席也

一度申坐

西界寺の境内もかう

一 西念寺

國所守西面御寺の御寺ノ上藤田井村

高寺の本寺也永祿立成奉難祐惠開基也

一 佛名寺 日没ノも本寺がちの本山也立文元己年同

登也

大宮若松明神社

リアミミタマ御高名不詳

一 客人檜原社

リアミミト

一 大布社

リスルヒラフ

一 小市社

リアミミタマ御年四月初八甲日九月廿

一 北山田村

新多村之傍村五條村とよ山田多属乃

ト接ら

一 沿海を石舟の船ノ江戸ハ佐賀乃ちぬく縣人每
至是船多昌乃達く近海と多様のもので山田、岡舟
ナレニ三四十年以迄あすてしとを船ナニ被る一
國少々今ふ般とゆき四月日吉の御年馬舟三
艘け此ノも以相付立條くふくはく土佐或云淡古
け淡古を速じと欲一とく地割も一例く立條乃
名向くとも得りテ解説ノ傳下つて
一 八幡社 北山田らすてち武之包白風四年二月十一日
勅額ニ依ク大内臣ほ唐多鷹敷行ハ情文及而祐と
勅旨と正八幡宮事くちに不空應神 天皇ナリ

藏王權社 口勧 えり

善宿 口勧 えり上三代後を名られ四月初申日

安安寺 口勧 えりと一向宗あちがちの事と天正十一
年春 安安寺

極樂寺 口勧 えりと西平朝子と高野良きの事と天
正九年春 安安寺

長教寺 口勧 えりと西平朝子と山陽圓山科あらもの
もと 永祿四年西平朝子

薬師堂 口勧 えりと平尊尼と佛善師如來の座像也
三八寸引墨の他あり

山田院 是義津川の河内守歴度也と土佐守也
大川守也

彈正池 大川守の名と下多村ノ田久也也
笠莊

上多村 はまくと多羅ノ里とよんと石人ノ下落也
草四條

旅人乃とけむ押上多羅の町と宿とひつじ経乃てや
ト多村 上多村北面ふくや山田乃川とすけく
打しむれぬる村とよ

一 専念寺 下笠村モロコシ佛芝寺ハナカニノ本山ハタケ 永保七甲子ヨウボナナカウジ

宗基也

一 光林寺 リ村モロコシ佛芝寺ハナカニ高タカシマ

一 西光院 リ村モロコシ淨セイ小文明年中ムサシノヒサシ美含運ミハラシ原ハラの
同墓之

一 宗宗寺 リ村モロコシ淨セイ小碧田傳主山國主計景ハタケキ以
ノ母モチ水原長門守秀源ハツシラノ女めの姫ヒメ名メイ長ナガト
活厄ハタマツ知光院宗宗山國義修守景隆ハタケルノ妻メイ宗
宗下笠村モロコシ五十石ハタケのおりと秀音ハツミ功ノウ裁スル一
下笠村モロコシ宗宗尼没後主計万ハタケミツ千チ之ノ件ケンの毛地

を卒モリ別モロコシ宗宗モロコシ之モロコシ知光院翌年会宗大師
と宗基モロコシ

一 順光寺 リ村モロコシ西幸教ハタケハタケ天文アキラカニ第モロコシ宗基モロコシ

一 專崇寺 リ村モロコシ天正九年顯如上人建立

一 專光寺 リ村モロコシ天正九年の事モロコシ

一 下笠古城跡 口モロコシありノ下笠忠右衛モロコシ宗地モロコシ

下笠住居モロコシ場モロコシ之モロコシ御家居モロコシ所モロコシ傳モロコシ永保九年

青地モロコシ跡モロコシ之モロコシ致モロコシ之モロコシ白毎モロコシ年モロコシ之モロコシ

理モロコシ田畠モロコシ

一 正一位大明神社 下笠村モロコシお傳モロコシ真宗豊祖丈

帝慶雲元年辰ノ年西田村大松樹下に御坐す
之庚寅年神殿造営され身中と肩なる巨樹
傍邊大工赤子多神牛頭天王等て素盞父鳥等
ノ年又武天皇の廢御之年八月四日也其ノ
鷲座と曰記あり处祭之神ニニ社主父鳥也偏當
姬八王子ノ社記曰下笠村明神者慶雲元年三月四日
影向同四月現平森木一枚木而宣為一郡東西守護
百六代後奈良院御宇神怨アリ享保三庚寅年九
月十七日再造修神殿同御宇天文九年奉授正一
位云々

夷社

口村

一
七條嚴松　口村湖岸ノシ石を大松ノモウタク
トス年を一ノノ月ノ日也ノト原ノ号ニテ之年
野側山の事シテ初也ニテ

一
駒井莊　足ト多村ノ門至浦ノ川ナツト
石ノシテ木ノ材ニミハ村野村官行集村十室
村大蔵村ニ吉佐成ヒ駒井三郎ト　集村野村野
村斗セヨムニミハ野村ノ野村ノ野村ノ
約井月略休シト作木ノ事ナヒ不ト以テ也

駒井庄

一 豚井川 下生と猪井店と中河から下生の邊

（もろ寺を）小川と云源を豊岡川て口村の東で

用ひ、今少し海うねりも廢して水落合川と名づけ

一大薺村 下生村の少くすみ村 宝芝寺の縁起曰
猪崎村大薺村と曰く往古は里に大蛇伝本主て國
威と疫害と多かく事多々て廢し秋々に薺乞之
り絶えず、薺原とかいへり大薺村の名號
出焉（もろ）くら、サ役山裏されと乞之

阿波泥草 大薺村と曰く

一 宝芝寺 大薺村と縁起曰天武天皇の御代工

カニと聖主屢ゆ爰とあつて故ふも御事と今も空き寺
（もろ）猪崎の少く放ち一人の毛を落すて曰ひ加八毛
萬師業の聖切元生に差し仰ぐる所にてく毒
化作（く）人と犯（く）薺名（むな）りて（く）事天神（く）
社（く）も傍（く）ら（く）まくはれと（く）ま（く）一室（く）か薺（く）と建
萬師業と安至（く）猪（く）毒也（く）め（く）ば（く）く
再（く）人の（く）（く）（く）（く）事（く）教（く）（く）（く）（く）（く）（く）（く）（く）
も（く）
薺（く）の靈芝（く）

蒜山にて黒喬草室には萬物の名を記す
たくへと坐つては大忙しがると、りくとたう
之を以て之と同と御感の條より一室の堂を建
て候すと、安至ノ時、中最初の爲を御靈験
なりと、辛め身と度を争ふ事とハアトシや、主に
極底天皇の御子と云ふ者、燒土とくの主上
を帝の御と莫がいにと再建候ひ伊勢太師へ
詣りて山門根や中堂の革作所としとく照引
にておれもさの石之儀ノ所終と道を改め、
因後は御立と云ひて、御立と申す事、
中又中主す

予の後佛へ案を承るに、日西院の御
了悟し、金と御来と同一件の強紀と見て
至らすと、御云ひて、表記へ四寸五分立像作成大
師の御、御立と仰せられ、御靈験也。巖山の御院
たゞと臣ち見と迎りて、ちうり殿も御くつゝ
事、今ハ終め一也。

緩堂

寔是の御、御立と仰せられ、御靈験也。田
比の字と申す事、後もの御立と云ふ事、長ちて
久き事と申す

若王子社

同上

宍村

大蓋村の東やうはせくはせし神の事

あし教ふる事なくして余はどんとおきり落

けと伝ふる者か一事ハ七度の毛ノ病は

安社大ぬゆ 宮村にまゆ申す申と經合

佛生寺

同上

佛因寺

同上

新芝坊跡

同上

又かく墓石をくつむと今より餘多くせやくもつ

一集村

宍村の事

一正山大明神社

集有
富浦石洋 每年甲子御

百日办の事

御弓

一觀音堂

口村正山社の暖門より石多十二面觀音

長久人守名立門地名長久人守

一新堂村

集いの事

山王權現社

新堂村とあり立門地名山王權現社

光輪寺

口村うち京佛寺の事久遠院の事

元基五郎通

通

一澤村

新堂村の事と佛光寺

一光明寺

口村うち佛光寺

一 薬師堂 リ村ミニニ薬寺とモハシモニ薬師堂傳
一 おも仰の仰て宗主ニ詳

一 屋内を リ村ミチ屋内つ天の像と模乃仰と七倍

一 ちげ像を届田の代の護持佛とよ。是因の系と云ふ
面有百一甲子ノ年有

面有百一甲子ノ年有

一 十里村 新里村の面より北之九つと十里の里等
の村名又、巨頭をすくすく同と一町、一町と一里と
十里村と字町乃村が全一スの里で里名アリ。後世
沿革もくち跡も多めかしも之一疑がアリる。

一 小安大明神社。十里村ミ多神、之詳

一 駒池 リ村ミテ長四弓モア長二十万斗駒井氏の池

一 トテ駒井池と云ふを今を駒池と云。

一 駒乃物 リ村ミテ寺モア、佛寺キテ久多院の事也

一 佛堂寺 リ村ミテ佛寺キテ久多院の事也

一 田井中村 田井中村ノ一白玉山有なる多吉山多吉の

一 有年多吉
一 大荷車社 リ村ミテ

一 品社 品村中村名田村ミテ
一 石田村 下多村の少くもアリ

長秋錄

後成

名之方

匡房

セく水も名田の里へ極ま國をうけてゆけし朝と之原
名主
匡房

西迎寺　ロ村主と天台律宗坂本東院寺の事も
鉢を乞うて度數　ロ村主と同墓主寺号等の由緒不詳

西村　吉田村乃少佐も工信を下す。又蓋西村
も少佐也。これ西村少佐は工信より是れ
一子を是持軍家也。即上院乃少佐之工信也。

自己の危一例として居る。多年を経てその化の名
を同じせし。と云ふ事、神君方より考へて之
は軍少傍(一)事。蓋亦傳と云ひ、別に固ニ至
り。又考へて其成天元とて凡ち十石計。ノ毎石五
斗

多幸。名命もく煙附。レルノ演蓮もく夏り尼
元くる日をもアモモ唐人小船ノ押。蓬尼ノアフと
僧也る。

家源寺。口村ミニ源士也。

常勝寺。口村ミニ淨也。

後継大明神。口村ミニ繁神。不詳。

地藏堂。口村ミニ源水。窓ガ有ア。地蔵菩薩

主惠心ノ作也。

白山權現社。口村ミニ

壇ノ堂。口村ミニ佐喜也。極樂也。萬代品村中村名田

村宮村片岡村溝田は村下ミ村也セナ村の墓所也所謂
行基ノ圓墓スニ昧のモノ一也。シテ而モ地蔵像及圓
魔王俱生神泰山彦君也。アモモト急く急ぐ急ぐ也。兜女
子アモ妙跡アリ。墳の右アモモト急ぐ急ぐ也。蓋怪
火アモ臣迎候ノ日里もアモ本を西。一。安史事歸の
事を記シ。シテ黒毛モ又云。怪火アモ。火アモ時と
シテ。机次アモ時アリ。亦偶々アモ少々。喜び方と
石もアモ少モ傍アリ。而油坊もアモ火アモ影。正度の色
マヒ火アモ。火アモ。

一品中村

品村ノ東也。

二堂

品中村ミチムラを石イシあるち跡アリタケと云ウムるち跡アリタケ

伊豆守

總社大明神社

口カミ村ムラを參スルれ毎年エニシテ四月ヨメ初成日ハツジンノヒ祭マツコト

神不詳

淨運寺

口カミ村ムラを淨シキ運ウン寺ジ

輿地志畧四十一終

近江輿地志畧卷之四十二

膳所 寒川辰清輯

栗本郡第四

一 矢橋村 新源村のゆくも村シムラを参考保シテモリ也ハは
矣早瀬アラセ乃ハあとアフタり。今昔コトヒの源ミズも池イシも
蓋カバ西ニシ側タガと云スルものも源ミズも池イシも國史クニシ又アリ人
形ヒメと區クニて所シテ。一内シタ乃ハ沿岸イリに小シき港ハと謂ス。謂
以シテ矢ヤ地ジ也ハ。湖上シマツシテ五十步ハを御ミサ行ス也ハ。船ボ艇ボウ
多タダ々タダタダ所シテ多タダ也ハ。是シテあり奉スル事モノ也ハ。

詳シテ申スル所シテ

万葉集

清海之哉ハ嚮乃小叶辛不送而作毛之故也其卷辛

支本集

公朝

了原也多鷦れみのむるうにあがくとゑくひち

堀川百首

公朝

少名略や多地乃清ア至ふ舟をソシムシテ御因の
鳥乃芝原郷の東路乃記曰十九日之度滿月ノ舟引
シテ石津ノイタツハ御一宿モ菟波津シトモシテ
與モ少くも貨車傍大もアヒムキノ案集ノ里勢又
乃長橋モシテスアリテマジヒスルルアレ

心をほし高年多はれれ京ます、務施多ア舟を
ナシテアリト白ひくニ上山モドリ游行に處の高
根のりひだりモシテスアリテ

移さずしゆふ上乃山アリテクノ向は處の久存
玉露叢ニ

鳥志云之永十甲戌年御上宿記曰アレ痕アラリには
海聲移動多アリト多有也アリ御舟にウチモアリ
痕風モアリテアリト多有也アリ鷗の船ア舟遊リ

一
般倚八幡社 多陽村ニ石を外土石ア應神天

皇左石ハ神印室石高良神ニ神記曰神翁社八幡家

者人皇四十代天武天皇白鳳四年乙亥二月十一日
依勅賴詔大中臣傳慶奉勅諸之書後八十二代後
鳥羽後建久元年十月二日源朝臣賴朝上洛之時
於矢橋津有神社在馬上而以鞭指之問侍人曰是
何神也侍人答曰八幡宮也賴朝下馬而拜之依之
百鞍侍之名同三年賴朝以卜祁兼藤奉再興社增
同四年八月十五日近宮所謂三所者應神天皇聖
母大明神高良大明神固所有子守勝手明神_{同日}又
有菱神廟_{別有}

右起一色ちぬ松祠寫而傳來也所目持乘而高而一詔

因繪写以加焉後之之原ニニ季夏吉唯神社富良長
上左多喜等ト部朝古多連多ノ多江毎年四月二ノ午日

一天杓石　口村四の印　大サ一圓三天清和御松武
天子御宇御殿大師石と天杓少不ナ一し天杓
引石と虛石とをくす、と名多稱のゆゝるが今み
て杓石と名せり其年毛る材、土人石の杓とたゞけハ西原
山ノ木立ノ内ノ御石也其地名小野谷と云ふ
事不傳手ノ御紀ノ文ノて杓ナリ。其事も
かく、皆奇數ノ世俗の因ノ御名不傳手ノ事也
象の氣候の承命瓜電日向郡行ノ事にて杓多々多々

是の化をもとより先國の氣とし、皆其氣とより
空と氣とよりとて、一國の氣と約とより、而
は行氣の氣をもつて、一國の氣と約とより、而
は行氣の氣をもつて、一國の氣と約とより、而

は行氣の氣をもつて、一國の氣と約とより、而

所謂天之老行者乎。蓋曰掌是鶴鱗，鄭道行謝鶴，題文
序曰禽原多大山，森林僻近於海，瞻無人焉，虎為燁也。
易經以兩泰山為陰虛之氣，草木上石之形，其陰陽變化
而鶴鷺翔而冰人兆鬼兆幽明亦一物也。日中下約弦，廣幾
于達，與中華書之木客山操似而非也。深山窮谷，但有
之毫形不可見，或現大身，則長人如信高鼻勾爪，復以小
小羽化雲騰，或變作黑形怪人，降字之曰天狗，蓋象惡星

也。予嘗自記之，而猶未了，以爲追也。其狀如羊而無角，天
狗之名，亦以是爲名也。是謂曰鶴鷺，曲翼昂首，艮為山為
黔喙也。爰是禹紀鶴，耶世虞神，羌王或引多是，或援
名國之號，而廻執名焉。其實可謂妄已。大凡三代而上，但
謂之東山神，後世不知起自何言。中國有他昔邦多天
狗，彼不稱鶴，虛望之，良甚。其君迺云不得謂其神，太帛
金氏所好，美數以是之，多祀之。其後人復以之，而
曰天狗，猶古而令也。而猶不約，而以之，則天狗也。而
以之，而猶不約，而以之，則天狗也。而猶不約，而以之，則天狗也。

五難題及括矣

志曰夷夏之交陽石名石當圓陽石名燥旱則殺
陰石雨則殺陽石皆應之是謂之水也

一 石津ち リサムハハム起曰 極哉至足の而了近唐

二年是開於以扇山修教大師作苦師像二件一碑之安
于根下中今一体者乃西之和也初修教聖令大
約投三之石於虛室喜乃至後也絕後此石固于矣
移情苦師又後於此也蓋苦師來此之後夜之
故之故而得之也之壁有之壁山之号或曰故壁山又
曰故壁山投石者而左曰石佛了照侍十二神將護度運
西作也自平城至是而至之以院而多安位于假使將軍

原義塗有陽差之若建立正車御後及易固事之額庵
寺也亦苦師像慈忍之大師之不作也而壁山像弘法
大师之不作也蓋此二佛均在多病故之以南之額
敗而負深事也極今苦師像也 也之苦師八今
歲矣固多風山中多之也子是也而南也今子
と號り能佛之苦五之苦三の守重教之修文教也
是也

一 玉泉寺 リサムハハム土木事多日院の事之其行

一 建房多事行修院の事多日山多事也其行
一 清瀧寺 リサムハハム事多日院の事之其行

漢子と是れ中興單卷上人と云矣其末澤

不益了

リサレバ一匁余東あれりめの通す

久約十ニ年あら致るゝ事無く

吾約了

リサレモ一向ふら多致るゝ事無く西院町

院家原立主某年五月上旬同奉長弟修之

大寺寺

リサレテ桂之院寺事と申候

寺是院事と連厚年四月の事奉

は修了

リサレテ後は未詳也

男多喜上人

也て石川姓也三月奉事至多喜大師

の修了

一 正高寺 甲子行ノ清五宗主御道院の事と云々本修院
古ノ傳は少く後修院事多修院事後と云傳古事と同奉事
ノ年代不詳

一 詠名寺 四付御佛殿山祐名寺と号清五宗主御道院
院の事と云々其事不詳中興高蓮和尚義上人天正
十一年冬月入寺お付西行ノ初ち高田田中と云て
之を或時平左衛門と号ひ申すと有行跡ノ事と
ア大修院事と云ふ事少く少く方田の事と云
テは今や事跡を失すか云う所也中興天正元年

一
野路村 おはたま村の山中より出でて人多
い蘿原と名づけ代々の老蘿原少佐蘿原とは
此の蘿原とよびて河原とも非と名づくとは
郊外の蘿原とよびて河原とも非と名づくとは
鷺島の山と云ふ少佐亮盛薩摩守忠彦は年
造河原と云ふ少佐亮盛薩摩守忠彦は年
朝と格辱に年中有余輕入法の時等は元和
少保時房忠門兼久の役に佐さる東證及後四年
に之く

拾玉集

卷模

近は清々翠蘿の蘿原夕紅と清風と夜の風

名寄

顯昭

旅人の心すむす門ひそかに壁蘿の山をのぞみゆき

王集

安の流四條

寺門面を黒御、袖口とく御たとく、壁蘿の蘿原

史木集

意定

山の翠蘿の蘿原の友に、ハシマ御と申す

正一位割支太助仲秋

翠蘿行と申す事三年四月初日

多川路の守在所を改め、毎年四月初日

辨才天社

日本ノウタニモト山とも号す三十碑川之

情狀

山中集

淨泉寺
甲子年歲次庚辰四月同參因安一

白香山集

丁巳之秋九申辛酉同客高今一夕不寐

卷之三

後漢書

卷之三

卷之三

卷之三

一
卷
之
一

一玉水　口引うら二間又三間の少しひだりを大
跨の面筋と或書曰は周上古^{ウツミ}陰^シと左ははく筋
路^カ可^ミうるもかの里^{カミ}山^カが原^カと筋
玉^カ高^カ也^カ山^カが原^カと筋^カて^カ山^カを^カ
之^カは^カ山^カを^カ考^カえ^カるや^カ多^カ々^カ望^カめ^カ川
と^カく^カせ^カ事^カ

午載集

後
編

望る事無事乃玉川義成の事と申す。日付
詠歌有櫻抄に今玉川の後ろ名と號す。月夜
やうな風と云はれて之を以て號す。

新玲瓏集

仲
芝

史木集

家
傳

新之御所乃西川之北也。其地傍山而有風吹
之。邦人之謂玉川。以之名山故也。山之南
有水。其源出高麗。東流過平壤。又東流過
漢州。又東流過固安。固安者。今之紀州小縣。毒水
追之固安也。秋水之源也。

近間比
ノホウ

九月十七日
ワサ行くお仕事書方をもとめ

卷之三

一 東條院 今豈能以多務御道の事も志向と
之を是志願の事様（ノ）（貲用節も志願の事様
ノ）（ノ）

一 上砥山村 東北庄内之始全佈在の事一ノ丁に
至候（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）
と別（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）

下砥山村

五百井大神社

上神（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）

及知清の奉祀

五年（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）

正一位小枝大神社

（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）

五年（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）

の日三代宮源（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）
白魚十七年二月五日追（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）
小枝神授位立位上又云之年六辛酉九月九日庚申授位
固位立位上枝神上五位上

原隱寺

（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）

支那年年齋（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）

山子村

（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）

（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）

（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）

（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）

一 滌陽院の聖号（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）

（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）

伽藍ノ内は曹洞もさへ三尺五寸年以多
天名ラムニ改メ又石年法以多シ行モ近所にて
金持モ多くと仰り

一小杖社 リサレバ御古事記の傳子の
少林寺十二所宮と一社トレーヤウオモ生土神と
モ多ク每年八月十二。

一大龜山洋光寺 リサレバ御古事記に曹洞も
ちキタリニ中世古く本高野の連属として領
主も化野のちの再建にて曹洞も御本堂を
後て山門より之を繋り之經済絶してかう
浪滅也

修業院も多文辛申新交教一寺と東室
莫壁の本庵と以テ中興園山とアリ萬壁山万
福寺の事もハシタ

久セウ跡也 リサレバも辛ハ向東西辛立^{或辛}
叢到寺 因セウ也ア一念本軒を経ちの事也

馬場村 らう村の事も古芳ハ岸田村と云ひサ
到修寺 リサレバ一念本軒を経ちの事也

多也付 之の外の事アラム也

因通寺 吊ラム行ケ石多本軒を経ちの事也

大日寺古跡

一 菩提寺ミタマ

一 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 379 380 381 382 383 384 385 386 387 387 388 389 389 390 391 392 393 394 395 396 397 397 398 399 399 400 401 402 403 404 405 406 407 407 408 409 409 410 411 412 413 413 414 415 415 416 417 417 418 418 419 419 420 420 421 421 422 422 423 423 424 424 425 425 426 426 427 427 428 428 429 429 430 430 431 431 432 432 433 433 434 434 435 435 436 436 437 437 438 438 439 439 440 440 441 441 442 442 443 443 444 444 445 445 446 446 447 447 448 448 449 449 450 450 451 451 452 452 453 453 454 454 455 455 456 456 457 457 458 458 459 459 460 460 461 461 462 462 463 463 464 464 465 465 466 466 467 467 468 468 469 469 470 470 471 471 472 472 473 473 474 474 475 475 476 476 477 477 478 478 479 479 480 480 481 481 482 482 483 483 484 484 485 485 486 486 487 487 488 488 489 489 490 490 491 491 492 492 493 493 494 494 495 495 496 496 497 497 498 498 499 499 500 500 501 501 502 502 503 503 504 504 505 505 506 506 507 507 508 508 509 509 510 510 511 511 512 512 513 513 514 514 515 515 516 516 517 517 518 518 519 519 520 520 521 521 522 522 523 523 524 524 525 525 526 526 527 527 528 528 529 529 530 530 531 531 532 532 533 533 534 534 535 535 536 536 537 537 538 538 539 539 540 540 541 541 542 542 543 543 544 544 545 545 546 546 547 547 548 548 549 549 550 550 551 551 552 552 553 553 554 554 555 555 556 556 557 557 558 558 559 559 560 560 561 561 562 562 563 563 564 564 565 565 566 566 567 567 568 568 569 569 570 570 571 571 572 572 573 573 574 574 575 575 576 576 577 577 578 578 579 579 580 580 581 581 582 582 583 583 584 584 585 585 586 586 587 587 588 588 589 589 590 590 591 591 592 592 593 593 594 594 595 595 596 596 597 597 598 598 599 599 600 600 601 601 602 602 603 603 604 604 605 605 606 606 607 607 608 608 609 609 610 610 611 611 612 612 613 613 614 614 615 615 616 616 617 617 618 618 619 619 620 620 621 621 622 622 623 623 624 624 625 625 626 626 627 627 628 628 629 629 630 630 631 631 632 632 633 633 634 634 635 635 636 636 637 637 638 638 639 639 640 640 641 641 642 642 643 643 644 644 645 645 646 646 647 647 648 648 649 649 650 650 651 651 652 652 653 653 654 654 655 655 656 656 657 657 658 658 659 659 660 660 661 661 662 662 663 663 664 664 665 665 666 666 667 667 668 668 669 669 670 670 671 671 672 672 673 673 674 674 675 675 676 676 677 677 678 678 679 679 680 680 681 681 682 682 683 683 684 684 685 685 686 686 687 687 688 688 689 689 690 690 691 691 692 692 693 693 694 694 695 695 696 696 697 697 698 698 699 699 700 700 701 701 702 702 703 703 704 704 705 705 706 706 707 707 708 708 709 709 710 710 711 711 712 712 713 713 714 714 715 715 716 716 717 717 718 718 719 719 720 720 721 721 722 722 723 723 724 724 725 725 726 726 727 727 728 728 729 729 730 730 731 731 732 732 733 733 734 734 735 735 736 736 737 737 738 738 739 739 740 740 741 741 742 742 743 743 744 744 745 745 746 746 747 747 748 748 749 749 750 750 751 751 752 752 753 753 754 754 755 755 756 756 757 757 758 758 759 759 760 760 761 761 762 762 763 763 764 764 765 765 766 766 767 767 768 768 769 769 770 770 771 771 772 772 773 773 774 774 775 775 776 776 777 777 778 778 779 779 780 780 781 781 782 782 783 783 784 784 785 785 786 786 787 787 788 788 789 789 790 790 791 791 792 792 793 793 794 794 795 795 796 796 797 797 798 798 799 799 800 800 801 801 802 802 803 803 804 804 805 805 806 806 807 807 808 808 809 809 810 810 811 811 812 812 813 813 814 814 815 815 816 816 817 817 818 818 819 819 820 820 821 821 822 822 823 823 824 824 825 825 826 826 827 827 828 828 829 829 830 830 831 831 832 832 833 833 834 834 835 835 836 836 837 837 838 838 839 839 840 840 841 841 842 842 843 843 844 844 845 845 846 846 847 847 848 848 849 849 850 850 851 851 852 852 853 853 854 854 855 855 856 856 857 857 858 858 859 859 860 860 861 861 862 862 863 863 864 864 865 865 866 866 867 867 868 868 869 869 870 870 871 871 872 872 873 873 874 874 875 875 876 876 877 877 878 878 879 879 880 880 881 881 882 882 883 883 884 884 885 885 886 886 887 887 888 888 889 889 890 890 891 891 892 892 893 893 894 894 895 895 896 896 897 897 898 898 899 899 900 900 901 901 902 902 903 903 904 904 905 905 906 906 907 907 908 908 909 909 910 910 911 911 912 912 913 913 914 914 915 915 916 916 917 917 918 918 919 919 920 920 921 921 922 922 923 923 924 924 925 925 926 926 927 927 928 928 929 929 930 930 931 931 932 932 933 933 934 934 935 935 936 936 937 937 938 938 939 939 940 940 941 941 942 942 943 943 944 944 945 945 946 946 947 947 948 948 949 949 950 950 951 951 952 952 953 953 954 954 955 955 956 956 957 957 958 958 959 959 960 960 961 961 962 962 963 963 964 964 965 965 966 966 967 967 968 968 969 969 970 970 971 971 972 972 973 973 974 974 975 975 976 976 977 977 978 978 979 979 980 980 981 981 982 982 983 983 984 984 985 985 986 986 987 987 988 988 989 989 990 990 991 991 992 992 993 993 994 994 995 995 996 996 997 997 998 998 999 999 1000 1000

弘治年六月二十一日

抄原序口付の事とて年の元卷

輿地志畧四十二終

15

